

有島武郎

卑怯者



卑
怯
者

青黄ろく澄み渡った夕空の地平近い所に、一つ浮いた旗雲には、入り日の桃色が静かに照り映はえていた。山の手町の秋のはじめ。

ひた急ぎに急ぐ彼には、往来を飛びまわる子供たちの群れが小うるさかった。夕餉ゆうげ前のわずかな時間を惜しんで、釣瓶つるべ落おとしに暮れてゆく日ざしの下を、彼らはわめきたてる蝙蝠こうもりの群れのように、ひらひらと通行人にかかけかまいなく飛びちがえていた。まともに突っかかって来

る勢いはずすために、彼は急に歩行をとどめねばならなかつたので、幾度も思わず上体を前に泳がせた。子供は、よけてもらつたのを感じもしない風で、彼の方には見向きもせず、追つて来る子供にばかり気を取られながら、彼の足許から遠ざかつて行つた。そのことごとく利己的な、自分よがりなわがままな仕打ちが、その時の彼にはことさら憎々しく思えた。彼はこうしたやんちゃ者の渦卷うずまきの間を、言葉どおりに縫うように歩きながら、しきりに急いだ。

眼ざして来た家から一町ほどの手前まで来た時、彼は

ふと自分の周囲にもやもやとからみつくような子供たちの群れから、すかんと静かな所に歩み出たように思つて、あたりを見廻してみた。そこにも子供たちは男女を合わせて二十人くらいもいるにはいたのだつた。だがその二十人ほどは道側の生垣のほとりに一塊ひとかたまりになつて、何かしゃべりながらも飛びまわることとはしないでいたのだ。興味の深い静かな遊戯にふけつているのである。彼がそのそばをじろじろ見やりながら通つて行つても、誰一人振り向いて彼に注意するような子供はなかつた。彼はそれで少し救われたような心持ちになつて、草履ぞうりの

爪^{つま}さきを、上皮^{まきみず}だけ播水^{まきみず}でうんだ堅い道に突っかけ突っかけ先を急いだ。

子供たちの群れからはすかいにあたる向こう側の、格子^{こうしど}戸立ての平家^{ひらや}の軒^{ひらや}さきには、牛乳の配達車が一台置いてあった。水色のペンキで塗りつぶした箱の横腹に、「精乳社」と毒々しい赤色で書いてあるのが眼を牽^ひいたもので、彼は急ぎながらも、毒々しい箱の字を少し振り返り気味にまでなまって読むほどの余裕をその車に与えた。その時車の梶^{かしほ}棒^{ぼう}の間から後ろ向きに箱に倚^よりかかっているらしい子供の脚を見たように思った。

彼がしかしすぐに顔を前に戻して、眼ざしている家の方を見やりながら歩みを早めたのはむろんのことだった。そしてそこから四、五間も来たかと思うころ、がたんとかけがねのはずれるような音を聞いたので、急ぎながらももう一度後を振り返って見た。しかしそこに彼は不意な出来事を見いだして思わず足をとめてしまった。

その前後二、三分の間にまくし上がった騒ぎのいちぶしじゆう一伍一什を彼は一つも見落とさずに観察していたわけではなかったけれども、立ち停どまった瞬間からすぐにすべてが理解できた。配達車のそばを通り過ぎた時、梶棒の間

に、前扉に倚よりかかつて、彼の眼に脚だけを見せていた
子供は、ふだんから悪戯いたずらが激しいとか、愛嬌あいきょうがないと
か、引っ込み思案であるとかで、ほかの子供たちから隔
てをおかれていた子に違いない。その時もその子供だけ
は遊びの仲間からはずれて、配達車に身をもたせながら、
つくねんと皆んなが道の向こう側でおもしろそうに遊ん
でいるのを眺めていたのだらう。一人坊ひとりぼつちになるとそ
ろそろ腹のすいたのを感じだしでもしたか、その子供は
何の気なしに車から尻を浮かして立ち上がろうとしたの
だ。その拍子に牛乳箱の前扉のかけがねが折り悪しくも

はずれたので、子供は背中から扉の重みで押さえつけられそうになった。驚いて振り返って、開きかかったその扉を押し戻そうと、小さな手を突っ張って力んでみたのだ。彼が足を停めた時はちょうどその瞬間だった。ようよう六つぐらいの子供で、着物も垢じみて折り目のなくなった紺こんの単衣ひとえで、それを薄寒そうに裾短すそに着ていた。薄ぎたなくよごれた顔に充血させて、口を食いしばって、倚よりかかるように前扉に凭もたれている様子が彼には笑止に見えた。彼は始めのうちには軽い好奇心にそそられてそれを眺めていた。

扉の後には牛乳の瓶びんがしこたましまつてあつて、抜きさしのできる三段の棚の上に乗せられたその瓶が、傾斜になつた箱を一気にすべり落ちようとするので、扉はことのほかの重みに押されているらしい。それを押し返そうとする子供は本当に一生懸命だつた。人に救いを求めることすらし得ないほど恐ろしいことがまくし上がったのを、誰も見ないうちに気がつかないうちに始末しなければならないと、気も心も顛倒てんどうしているらしかった。泣きだす前のようなその子供の顔、……こうした *suspense* の状態が物の三十秒も続けられたらうか。

けれども子供の力はとても扉の重みに打ち勝てるようなものではなかった。ああしていることやがておお事になると彼は思わずにはいられなくなった。単なる好奇心が少しぐらつきだして、後戻りあともどしてその子供のために扉をしめる手伝いをしてやろうかとふと思ってみたが、あすこまで行くうちには牛乳瓶がもうごろごろと転げ出しているだろう。その音を聞きつけて、往来の子供たちはもとより、向こう三軒両隣の窓の中から人々が顔を突き出して何事が起こったかそこちちを見る時、あの子供と二人で皆んなの好奇的な眼でなぶられるのもありがたい役

廻りではないと気づかったりして、思ったとおりを実行に移すにはまだ距離のある考えようをしていたが、その時分には扉はもう遠慮会釈もなく三、四寸がた開いてしまっていた。と思う間もなく牛乳のガラス瓶があとからあとから生き物のように隙すきまを眼がけてころげ出しはじめた。それが地面に響きを立てて落ちると、落ちた上に落ちて来るほかの瓶がまたからんからんと音を立てて、破れたり、はじけたり、転がったりした。子供は……それまでは自分の力にある自信を持って努力していたように見えていたが……こういうはめになるとかっとかあわて

始めて、突っ張っていた手にひとときわ力をこめるために、
体を前の方に持って行こうとした。しかしそれが失敗の
因もとだった。そんなことをやったおかげで子供の姿勢はみ
じめにも崩くずれて、扉はたちまち半分がた開いてしまった。
牛乳瓶はここを先途せんどとこぼれ出た。そして子供の胸から
下をめった打ちに打っては地面に落ちた。子供の上前うわまえに
も地面にも白い液体が流れ拡ひろがった。

こうなると彼の心持ちはまた変わっていた。子供の
無援むえんな立場を憐あわれんでやる心もいつの間にか消え失せて、
牛乳瓶ががらりがらりととめどなく滝のように流れ落ち

るのをただおもしろいものに眺めやった。実際そこに惹起じやつきされた運動といい、音響といい、ある悪魔的な痛快さを持っていた。破壊ということに対して人間の抱いている奇怪な興味。小さいながらその光景は、そうした興味をそそり立てるだけの力を持っていた。もつと激しく、ありつたけの瓶が一度に地面に散らばり出て、ある限りが粉微塵こなみじんになりでもすれば……

はたしてそれが来た。前扉はぱくんと大きく口を開いてしまった。同時に、三段の棚が、吐き出された舌のように、長々と地面にずり出した。そしてそれらの棚の上

にうんざりと積んであつた牛乳瓶は、思ったよりもけたましい音を立てて、壊れたり砕けたりしながら山盛りになつて地面に散らばつた。

その物音には彼もさすがにぎよつとしたくらいだつた。子供はと見ると、もう車から七、八間のところを無二無三に駈^かけていた。他人の耳にはこの恐ろしい物音が届かないうちに、自分の家に逃げ込んでしまおうと思ひ込んでゐるようにその子供は走つていた。しかしそんなことのできるはずがない。彼が、突然地面の上に現われ出た瓶の山と乳の海とに眼を見張つた瞬間に、道の向こ

う側の人垣を作ってわめき合っていた子供たちの群れは、一人残らず飛び上がらんばかりに驚いて、配達車の方を振り向いていた。逃げかけていた子供は、自分の後に聞こえたけたたましい物音に、すくみ上がったようになつて立ち停つた。もう逃げ隠れはできないと観念したのだろう。そしてもう一度なんとかして自分の失敗を彌縫びほうする試みでもしようと思つたのか、小走りに車の手前まで駈けて来て、そこに黙だまつたまま立ち停つた。そしてきよろきよろとほかの子供たちを見やってから、当惑し切つたように瓶の積み重なりを顧みた。取って返しは

したものの、どうしていいのかその子供には皆目見当がつかないのだ、と彼は思った。

群がり集まって来た子供たちは遠巻きにその一人の子供を取り巻いた。すべての子供の顔には子供に特有な無遠慮な残酷な表情が現われた。そしてややしばらく互いに何か言い交していたが、その中の一人が、

「わーるいな、わるいな」

とさも人の非を鳴らすのだという調子で叫びだした。それに続いて、

「わーるいな、わるいな。誰かさんはわーるいな。おい

らのせいじゃな—いよ」

という意地悪げな声がそこにいるすべての子供たちから一度に張り上げられた。しかもその糺きゆうもん問の声は調子づいてだんだん高められて、果ては何処どこからともなくそわそわと物音のする夕暮れの町の空気が、この癩かんだか高な叫び声で埋められてしまうほどになった。

しばらく躊躇ちゆうちよしていたその子供は、やがて引きずられるように配達車の所までやって来た。もうどうしても遁のがれる途みちがないと覚悟をきめたものらしい。しよんぼりと泣きも得せず突っ立ったそのまわりには、あらん限

りの子供たちがぞろぞろと跟ついて来て、皮肉な眼つきでその子供を鞭むちうちながら、その挙動の一つ一つを意地悪げに見やっていた。六つの子供にとって、これだけの過失は想像もできない大きなものであるに違いない。子供は手の甲を知らず知らず眼の所に持って行ったが、そうしてもあまりの心の顛倒てんとうに矢張り涙は出て来なかった。彼は心まで堅くなつてじつとして立っていた。がもう黙つてはいられないような気分になつてしまつていた。肩から手にかけて知らず知らず力がこもつて、唾つばをのみこむとぐつと喉が鳴つた。その時には近所合壁から大人おとな

までが飛び出して来て、あきれた顔をして配達車とその
憐あわな子供とを見比べていたけれども、誰一人として事件
の善後を考えてやろうとするものはないらしく、かかわ
り合いになるのをめんどろくさがっているように見え
た。そのていたらくを見せつけられると彼はますます
焦立いらだった。いきなり飛びこんで行って、そこにいる人間
どもを手あたりしだいになぐりつけて、あっけにとられ
ている大人子供を尻眼にかけながら、

「馬鹿野郎！ 手前たちは木偶でくの棒だ。卑怯者ひきようものだ。この
子供がたとえばふだんいたずらをするからといって、今

もいたずらをしたとでも思っているのか。こんないたずらがこの子にできるかできないか、考えてもみる。可哀そうに。はずみから出たあやまちなんだ。俺おれはさつきから一伍一いちぶしじゆう什をここでちゃんと見ていたんだぞ。べらぼうめ！ 配達屋を呼んで来い」

と存分に痰たんか呵を切ってやりたかった。彼はいいいじしなながら、もう飛び出そうかももう飛び出そうかと二の腕をふるわせながら青くなって突っ立っていた。

「えい、退どきねえ」

とって、内職に配達をやってる書生とも思わしく

ない、純粹の労働者肌の男が……配達夫が、二、三人の
子供を突き転ばすようにして人ごみの中に割りこんで来
た。

彼はこれから気をつまるようないまいましたい騒ぎがも
ちあがるんだと知った。あの男はおそらく本当に怒るだ
ろう。あの泣きもし得ないでおろおろしている子供が、
皆んなから手柄顔に名指されるだろう。配達夫は怒りに
まかせて、何の抵抗力もないあの子の襟えりがみでも取って
こづきまわすだろう。あの子供は突然死にそうな声を出
して泣きだす。まわりの人々はいいい気持ちそうにその光

景を見やっっている。……彼は飛び込まなければならぬ。飛び込んでその子供のためになんとか配達夫を言いなだめなければならぬ。

ところがどうだ。その場の様子がものものしくなるにつれて、もう彼はそれ以上を見ていられなくなってきた。彼は思わず眼をそむけた。と同時に、自分でもどうすることもできない力に引っ張られて、すたすたと逃げるように行手の道に歩きだした。しかも彼の胸の底で、手を合わすようにして「許してくれ許してくれ」と言い続けていた。自分の行くべき家は通り過ぎてしまったけれど

も気もつかなかった。ただわけもなくがむしやらに歩いて行くのが、その子供を救い出すただ一つの手だてであるかのような気持ちが出来て、彼は息せき切って歩きに歩いた。そして無性むしように癩癩かんしゃくを起こし続けた。

「馬鹿野郎！ 卑怯者！ それは手前のことだ。手前が男なら、今から取って返すがいい。あの子供の代わりに言い開きができるのは手前一人じゃないか。それに……帰ろうとはしないのか」

そう自分で自分をたしなめていた。それにもかかわらず彼は同じ方向に歩き続けていた。今ごろはあの子供の

頭が大きな平手でびしやびしやはたき飛ばされているだろうと思うと、彼は知らず識^しらず眼をつぶって歯を食いしばって苦い顔をした。人通りがあるかないかも気にとめなかった。噛^かみ合うように固く胸高に腕ぐみをして、上体をのめるほど前にかしげながら、泣かんばかりの気分になって、彼はあのみじめな子供からどんどん行く手も定めず遠ざかって行った。

日本文学電子図書館

小さき者へ

著 者：有島武郎

制作者：宮澤一郎

出版社：角川文庫、角川書店
昭和43年7月30日 30版



日本文学電子図書館